西征軍と一日の人馬

名稱の有趣味と實際の沒趣味

憐むべき樂土

をも有せざりしと。又曰く見らるゝ如き荒寥たる沙漠帶も、當年の兵馬絡繹織るが如く實に盛況を極めたり。即ち光緒元年十二月、長將軍の通過を始めとし、次で二年三月、金、劉、徐の各將軍、最後に同十月左宗棠の通過に至り、平均一日兵卒一千名、車五百輛、糧食は麵、粟、稷を用ひたり云々。

曰く紅柳園、曰く大泉子、曰く馬連井と、何ぞ支那驛名の有趣味なる。唯〻耳に快感を與へるのみにて、眼に些も快感を與ふるもの無し。前途とても、堂々たる名稱の下、僅々二三家乃至五六家あるに過ぎずとは、啞然たるの外あらざるなり。

扨は兎に角、斯る索寞荒寥の裡に棲息して、食ふに美味なく、病むも醫藥なく、毎年嚴寒に困み、隆暑に艱み、時に暴風の猛威を逞うする有り、傍人より之を觀れば、困苦缺乏の外、何等の娯樂なきが如し。然れども彼等は生來此の一局地より他を知らざる者なり。此の一局地より他を知るの要あらざる者なり。縱ひ彼等は他を知るも、依然其れ以外の地は知らざる者なり。是に於てか索寞荒寥の地も樂土なり。粗食も決して粗食ならず、病みて斃るゝも恨みなし。天山の風雪も、更に意とする所あらず。不便とは進歩せる人の眼よりせる反映にて、進歩を知らざる彼等は、畢